ICM 2026 Section Lecturer 体験記

東京大学大学院数理科学研究科
佐々田　槙子

1. はじめに

フィラデルフィアコンベンションセンターで 2026 年 7 月 23 日から 30 日に行われた ICM2026 に，Section Lecturer として参加しました．ICM は初めて参加しましたが，大変貴重な機会だったと感じております．新たな出会いをはじめ，たくさんの方との交流の機会に恵まれ，個人的なエピソードとして印象に残っていることも多くあるのですが，広く公開される文章ですので，ここでは数学の講演，数学と芸術，$(WM)^2$，会議全体の印象，についてご紹介させていただきます．

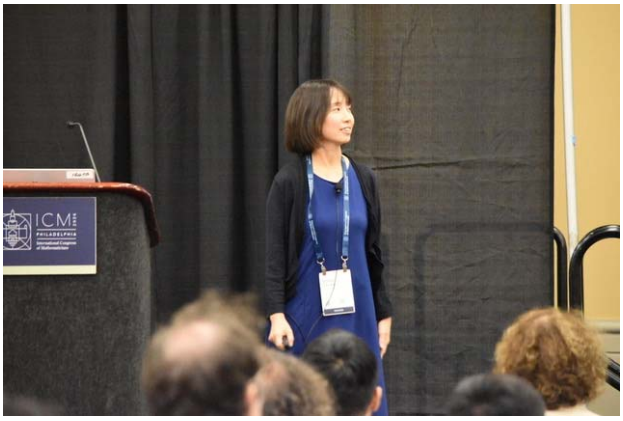
2. 数学の講演

ICM2026 では，非常に多くの講演がパラレルで行われていました．スケジュールの全体像を把握するのは素人には大変困難なため，Cvent Events というスマホのアプリが準備され，興味のある講演を各自であらかじめ登録してオリジナルのスケジュールを作成できるようになっていました．それでも，講演会場を探したり，どちらに行こうかと迷っていたりするうちに，なんとなく聞き逃してしまう講演もありました．また，スマホと常ににらめっこしながら会場を渡り歩いているうち，講演を聞くことよりも予定したスケジュールをこなすのが目的のようになってしまっているのでは，と感じる瞬間もありました．魅力的な講演が多いことは素晴らしいことではありますが，一つの講演をじっくり聞いて，講演者に質問したり，余韻を楽しんだりする間もなく，講演会場を次々移動していくというスタイルは，講演者にも聴衆にも勿体なかったというのが正直な感想です．特に，ICM という特別な機会のために，たっぷり時間をかけて準備されていることがよくわかる素晴らしい講演ばかりだったので，なおさらです．

特に印象に残ったのは，今回のフィールズ賞受賞者である Yu Deng 氏，個人的にも昔からよく存じ上げている Jeremy Quastel 氏，お名前はずっと伺っていていつか講演をお聞きしてみたいと思っていた時枝正氏，の 3 名の講演です．時枝氏の講演はあまりに面白く（数学的にもトークという意味でも），聞いている間ずっと笑いっぱ

なしでした．隣の方も爆笑されていて，途中で何度も共感するように目が合ってしまいました．私には 3 名の講演の魅力を具体的に紹介する力量は全くありませんが，講演は順次オンラインで公開されるそうですので，ご興味のある方はぜひご覧ください．

私自身の講演については，良いか悪いかはともかく，40 分の中にずいぶん内容を詰め込めたように思います．前日に何度も練習し，初心に帰ることができる貴重な機会でした．講演後，10 名ほどの方が質問に並んでくださって感激しました．



3. 数学と芸術

ICM2026 の会場には，数学に関わる展示作品が多数飾られたホールがあり，その一角では，毎日様々な映画が上映されていました．さらに，アメリカ数学会の主催による数学をテーマにしたコンサート「The Music of Mathematics」も行われました．映画の時間は講演や昼食と重なっていて，ほとんど観ることができませんでしたが，コンサートと展示作品はどちらも堪能することができました．



なかでも，「Mathemalchemy」（https://mathemalchemy.org）という空間芸術作品は，全体の壮大なストーリーから細部の可愛らしい遊び心まで，数学へのあたたかな愛が溢れていて，眺めているだけで幸せな気持ちになりました（写真 4 枚はいずれも，Mathemalchemy 展示の一部を筆者が撮影）．国際数学者連合の元総裁でもある Ingrid Daubechies 氏がキルト芸術家の Dominique Ehrmann 氏の立体的な作品をみて，「この素晴らしい手法を使え

ば，数学の魅力を表現できる」と閃いたことがきっかけとなり，合計 24 名の数学者，芸術家，職人がチームとなって作り上げられた幅約 6 メートル，奥行き約 3.2 メートル，高さ約 2.9 メートルという非常にスケールの大きな作品です．この作品の制作過程や，細部に込められた様々なストーリーを Ingrid Daubechies 氏が自ら紹介する講演は，ICM2026 の Public Lecture として，Plenary Talk と同じ会場で行われました．こちらも動画が公開されていますので，ぜひご覧ください．







4. World Meeting for Women in Mathematics ＝ (WM)^2

World Meeting for Women in Mathematics は，4 年に 1 度，ICM 初日の前日に行われており，2018 年が第 1 回で，今年が 3 回目の開催でした．前回は ICM 同様にオンライン開催であり，私はパネルディスカッションのパネリストの一人として登壇しましたが，対面での参加はもちろん今回が初めてでした．参加者にとっても会場の関係者にとっても，実質的に ICM 初日のようなもので，はじめはやや緊張感があり，

マイクやプロジェクタのトラブルなどその後の運営が心配になることもありましたが，ランチタイムに行われた小グループでのディスカッション頃から段々と打ち解けた雰囲気となり，ポスターセッションはかなりの盛り上がりとなっていました．

小グループでのディスカッションは，21 のテーマに分かれて，各自の関心のあるところに参加します．テーマは非常に多様ですが，やはり，AI との関わり方，いかに次世代育成をするか，といった全世界共通の喫緊の課題がいくつものグループで議題となっていました．次世代育成に関しては，多くの優秀な若者が自分の力に自信を持てないために数学を辞めてしまうこと，特に女性にその傾向が強くみられること，も話題に挙げられていました．今年のフィールズ賞受賞者の Hong Wang 氏の紹介ビデオの中で，子供時代から数学が好きだったが大学に入って数学がとても難しいと感じ落ち込んだこと，一度は数学以外のキャリアを真剣に検討したこと，が紹介されていて，烏滸がましいとは思いつつ強く共感しました．全く余談ですが，同じ紹介ビデオで Wang 氏が着ておられたカナダグースの赤いコートもお揃いで，勝手にさらに親近感を持ちました．

AI や次世代育成以外のテーマも，話題としては（特に女性研究者の間では）全世界共通のものばかりでしたが，タイトルの切り口が日本とは少し違うと感じました．「競争的試験にジェンダーバイアスはあるか（Is there a gender bias in competitive exams?）」，「研究の生産性と意味のある人生のバランス：効率性は常に正義か？（Balancing Research Productivity and a Meaningful Life: Is Efficiency Always the Answer?）」，「バランスのパラドックス：大学における多様性の確保と偏る負担の矛盾（The Paradox of Balance: Representation vs. Overloading in Academia）」など．そして極めつけは「When to say yes -- How to say no」「The No Club in mathematics: Saying no to non-promotable work」といった具合です．属性を問わず気になる方も多くいらっしゃるのではないでしょうか．多様な背景を持つ数学者が集まり，類似した課題や困難についてどのように感じ，どのように対応しているのかを知る機会は，参加者それぞれにとって大変貴重なものだったように思います．

$(WM)^2$ではパラレルセッションはなく，4 つの全く異なる分野の数学の講演をゆっくりと味わうことができました．特に，ICM の方では（専門の近い分野の講演でさえ重なっているくらいの過密スケジュールで）聞くことのできない専門外の話を聞くことができ，大変楽しかったです．Chelsea Walton 氏の講演は，学部 1 年生の線形代

数から始まって，あれよあれよと最近の話題まで滑らかにつながっていき，すっかり全部わかった気になる魔法のような講演でした．



5. 会議全体の印象

最後に，ICM2026 全体についての率直な印象を少し述べたいと思います．これまでご紹介してきたように各々のイベントや講演，展示にはたくさんの魅力がありましたが，会議全体としては，やや寂しい感じがしたというのが正直なところです．理由はいくつかあると思いますが，やはりアメリカでの開催への反対が大きく，参加者数が最近の ICM よりかなり少なかったようです．参加を希望していても，ビザが取れずに参加できなかった人もかなりいたと聞いており，現在の政治的な状況が会議全体にも残念ながら暗い影を落としていたように思います．コンベンションセンターという天井が高く廊下が広く無機質な会場が，人の密度をさらに下げ，冷房もかなり効きすぎていて寒かったことも，人々の熱気を下げてしまう方向に影響していたような気もします．フィールズ賞受賞者予想の盛り上がりが当日にはなかったこと，円安の影響もあってか日本からの参加者が特に少なかったこと（中国から参加している大学院生に複数会い，全員大学に旅費を支給してもらっていると聞いて彼我の差にもショックを受けました）など，様々な要素が重なってしまったように思うので，もしまた ICM に参加する機会があれば，よりお祭りらしさを味わえたらと期待しています．お祭りらしい ICM を実現するには，世界中の誰もが安全に安心して数学を楽しめる平和で開かれた環境が必要であり，そのような未来に向けて，ほんの小さな一歩でも自分のできることを頑張っていきたいとあらためて感じています．